

Centimetres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak
LICENSED PRODUCT

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black



三編
下

茶の月

13
3077
9



へ13
3077
9



花鳥風月第三編卷之下

東郡

梅亭金鶯編次



月をこぼしハチふ物を懸けけは秋牙一ツの柱下り
 あつ後どか柳ハ一人おる今も此夕暮の寂しさを
 燈火のつけさどあつも揺るごとく燃と形跡不さ
 ち月影を泳めくホッと通息つた一呼吸と運のつら
 めハ何方へまのつても休方ぐたの世処の家へ暮をれ七

まふつあひ負さん（前六）もききさうざらうとむつて飛ぶ
あふ積うろふかばきさんへ雞縁（りえん）なるて負さん
眺まへじとと書よしと夏へ外（すか）てもか見いさん（まき）
眺まより優しく法（ほう）成て下さるて有縁（あひだ）へとも積いも
む礼の云やうい云けとど胡（こ）又眺（た）又眺（た）さん（さん）の縁（えん）
少乞地（せうきぢ）の縁（えん）をう四様（しやうやう）縁（えん）のさう積（つ）もみさうけとど此
方（かた）又雲々（うんずん）の云（い）のさう何（なに）振（つ）と巨（こ）やうをれも此
まつ海（うみ）を来（き）ゆる様（よう）悪（あく）葉（えつ）つひのまへへの不（ふ）とあ身（み）振（つ）
ノ後と下ノ一

モ傍（かた）くくつて飛ぶたひけとど養母（やうぼ）さんの山（やま）負（お）さん
まの海（うみ）を来（き）ゆる様（よう）悪（あく）葉（えつ）つひのまへへの不（ふ）とあ身（み）振（つ）
何（なに）と敗（た）えんかともあふ事（こと）抱（かか）くと何（なに）ゆ（ゆ）ま（ま）と
居（い）やうより一層（いちじやう）のゆ（ゆ）出（で）しくさうぐと十里（じゆり）には十（じゆ）里（り）眺（た）
ふとや人（ひと）性（じやう）たひいひひるまへト彼方（かた）のさうと縁（えん）めし
何（なに）と願（ねん）を移（うつ）入（い）と根（ね）の居（い）林（りん）や逆刺（さか）の出（で）来（き）も
あつたぐ万（まん）一（いつ）を処（ところ）けりて殺（ころ）さすとも今のさひは比（ひ）が
まふ余（あま）へ惜（おし）くも云（い）けとど左（さ）振（つ）あう負（お）さん（さん）不（ふ）を此（こ）

まへくま
 まへくまはてが珠は悲しくけほど被振老のく居人も毎
 ら匝らうと必要も沈むを折らう事る仰ぐ居るの
 方浮べ味線の名ふつとて暖るハ草の本都尾が七加
 減よりお涙の涙の加減の面白く

「悲ぶ慈路はそとちあまよこを重んぶのいのち

舟の淵まよがかりのそ顔をもむる酒

柳 二被唄の文句のあり志のんで急とゆるめハ流し

も不始合ダ的按より親がみそハたり 必ひ切く性
 巴の指うけたりといへるまの被指のそえは自作は
 と占考でも入て若ううか英電でも抹のけほどを
 指のそを恃むやうな人の才ト涌息と吻がけが
 指さく先刻が見えんが下まると過去のた葉も若も
 悪いも事と次骨を骨のそあに相終ある人トハ出濟
 介てよとあひまると嗽ととせ方よ奉る奉出の紙小
 包にても葉まよとそまに床のるへ上て途ま身と志ま

くしそ処へ平伏合掌なり 不断念をさる 法要の観音
菩薩と清く心のかひとみく後身書の紙とらち
ひき中より二ツ掃のふと 辻右葉子の順をさめ第一
十返と書くと毀せん中より紙二紺泥をりて掃る
辻右「必ひ切てまわてらん」第二返めと出してくれば
「恐怖必ひも世とらる」とサ 第三返めとらりてらる
「夢のやうに掃くよ」と記してらるふか柳とよるこ
必ひ切てまわては院家とら此処と抜て跳入へたて

恐怖必ひも世とらるふか柳とよるこ
心掃くよ必ひ掛を自ら入るをさるといふ法要
の観音さぬのか昔の辻右心の定るとらる世もとら
此家とららる必ひ出きてとらる明朝のあらく
明美の死子傍の祀ぬるふえ世のほくろとらる
一人長頸のやうに包むとらる小風呂に世を知らる
のせねも必ひ八肝の居りてとらる用名とらる
此処へ何方の知れども門は掛るゆ焼の文字ふ



もろく居るのそりえと魂魄のよらり下り下り側へ
注ぐ目おとむあさんを探せりさやう小ぬてま事人
か。エ。モ。シ。水姓をたさると嘆り殺して仕舞ひんせと白
眠とらりしと出まらうか政の背中を襦き打くつゆの
波のと休めらぬサ然が家のる麻目おも大藤の好
あやうごう初まらるゆらうと推し否しうらうが試みの
ぢやア清ごとくをえて膝り寝返小も来をうかぬヨボ
ニその初返とついでひ出しよりかむ居へ寝てはまふ

大後々もき疎へ運今々もあまんと扉下のすこの
取小魚のあがらうらうと立て居りさやうあさんのかせ
一の通り何れもかかやさんの出果は遠ひにせ人をせん開
の心抱あやアハととふと吾儕の悲やう慄くくおと
打掛さうさやうの公持監へ出くもまア否と一吾儕ハ
此らさうさ毎晩と夜あめとて又掛さのさう幸さんのあ
枕中さうさあり連も破処小居くへああも吾儕も余と
掃くさうさお遠たへうさ世日子く何処へ住たいとせ

ふのごろ沐浴 劫えんげもあやふ八やふが引ひき負いのがら隠かくせとわきんくもあ
かえ世よを遊あそ松まつまきふも何なんぞと且かつおののと人ひとハ可か怪かいなり
くあ現げんとてさうとげとど忠ちゆう者者がた万ばん度ど掬くきよふふあ
てをあ何なんへ世よも知ちりぎでササホホニ劫えんげもああととふハ不ふ暇じま瓜う
をあののとてさうとげとど忠ちゆう者者がた万ばん度ど掬くきよふふあ
くあ現げんとてさうとげとど忠ちゆう者者がた万ばん度ど掬くきよふふあ
りてもあいふのやアあ何なんと乳ちゆ味みが熱ねつくてたうあいふま
何なんのササ史しハ平へい乳ちゆで何なん対たいひますかかハあ平へい乳ちゆとや自じ分ぶん辨べん

さぐりて何なんをあとつろああ入いりまあが何なん目めもか
何なんしとてさうとげとど忠ちゆう者者がた万ばん度ど掬くきよふふあ
引ひ引ひをあ！ 候あう侍しやうさうあむらああがあとつろああ入いりまあ
何なん子こ朝あさりあるあとてさうとげとど忠ちゆう者者がた万ばん度ど掬くきよふふあ
くも掛かりあまあが忠ちゆう者者と遊あそぶとてさうとげとど忠ちゆう者者がた万ばん度ど掬くきよふふあ
アあ不ふ頼らんんんであ遊あそぶとてさうとげとど忠ちゆう者者がた万ばん度ど掬くきよふふあ
どう乳ちゆ味みの熱ねつくてたうあいふまあが何なん目めもか
もあ何なんをあとつろああ入いりまあが何なん目めもか

上とのが降り甘ハ藍梅小江さう世振あふ小成て来々
がまじわかさんとか家へ進たふやう小居とバ音城の居
六珠と安公後さう可や何指又欲て五ハおあさんク
落さうて居るお家の旦那とをさうて信あうサ
い何ぞと又と被指ると云のさあてか竹と捕
へて何とくせ小怪さうハおあさんの方へ何とさうて
も不敵ハ可也さうてホニ男の命さう後さう恐怖
世対甲んせ一軍さう信とあさうおあらの福と及つた

くさ「さぞと背と板板面のまちて棄て居る然も小
付と後の中う小電致さうらう。モシハ新造さあへ
が止まりませんぜエと白服とさうと顔伊忠子ノ鼻を
いと付せえお政の顔と表いつとえてわ。吾儂の教を
か祭りうあうハあをハヨモ指小強めんお其てあふ
ハお顔ハあ祭りがあうあふでも世処のところを
あうささうぜハお柳のと比へらさあアは免と松エ
アう世世方のさう人ハ被指のさう不すあうエ打さ

中^{ちゆう}の^の寝^ねボ^ボリ^リ改^改正^正の^の味^味カ^カ悪^悪ク^クナ^ナリ^リ怖^怖リ^リ
コ^コ見^見テ^テ改^改正^正の^の味^味カ^カ悪^悪ク^クナ^ナリ^リ

幸^幸の^の不^不平^平を^を時^時の^の抑^抑々^々より^{より}か^かん^ん重^重が^が幽^幽冥^冥本^本と

と^との^の先^先々^々出^出仕^仕せ^せず^ずか^か改^改正^正の^の味^味カ^カ悪^悪ク^クナ^ナリ^リ

此^此の^の物^物遣^遣り^りし^しも^も元^元より^{より}是^是の^の身^身を^を見^見て^て改^改正^正へ

是^是と^と殊^殊々^々と^と恐^恐怖^怖と^との^の煩^煩り^りを^を見^見て^て幸^幸の^の不^不平^平に^に慰^慰ら

ふ^ふ思^思ふ^ふ者^者と^とく^くひ^ひて^て味^味カ^カ悪^悪ク^クナ^ナリ^リ

て^て終^終り^りす^すか^か改^改正^正の^の味^味カ^カ悪^悪ク^クナ^ナリ^リ

概^概決^決して^{して}田^田舎^舎人^人と^と斗^斗ふ^ふを^を人^人

一^一の^の世^世に^に生^生か^かる^るは^は何^何処^処か^かも^もヨ^ヨリ^リヨ^ヨリ^リと^と思^思ふ^ふ

う^う何^何時^時か^から^らう^う七^七の^の日^日も^も成^成る^る子^子息^息と^と思^思ふ^ふ本^本下^下ま^まへ

世^世に^に生^生か^かる^るは^は一^一世^世に^に生^生か^かる^るは^は一^一世^世に^に生^生か^かる^る

ま^また^た一^一世^世に^に生^生か^かる^るは^は一^一世^世に^に生^生か^かる^る

た^た一^一世^世に^に生^生か^かる^るは^は一^一世^世に^に生^生か^かる^る

と^と思^思ふ^ふ者^者と^とく^くひ^ひて^て味^味カ^カ悪^悪ク^クナ^ナリ^リ

自^自己^己の^の物^物を^を推^推か^かる^るを^を人^人

扱のも空理ぢやアなりサ何ぢも在取の棄る船と大概ぢ
賞の伝言として早く此方へ引き出さして仕舞やア腹より
令の二箱や二箱へ括入居る遠へ引くまじ此方へ奏
申す下も此サ第一且好と一可也也や且好が括の好
も申す何松が政めが自己と好と好の人情をまじ
ても長いらち申すむむと水此心の起る扱とも云蓮
花は又よかばまゝの化め下云あかき身括ひ一可也也
まじ虫の毎ぢ何よくも他へ好ると出扱とつ入のて有

箱へタアも政申あは除をを鳴きうと好のこが悲掛がら
せりふも及石ひへとをを急とて居るけと此島の腹を
ぞ此方が独く眠つて居ると好へ木のより射するぬが有
うう肝を淡く眼をめて入ると蓮の葉をうう。キヤと
主人扱入て抱くと隔紙の外のをうて。ガククと笑え
まじ此の乳味の悪さ。わしく監へせくと二人喃々
此の好電屋の取改はまじ此をうう折うう及の傍に
あえまう。まじ此の娘が悲掛とまじ此未入アが物

とあつちしつうのあつちのまへに跳子と申へ此方らのをう入集つ
て置しつうのませうらつ三跳子と振入り娘の顔と見え
怖りおあさんへお柳さんおやアお対へやせんうと云れて此方
も司とせり後へも先へもお娘ぬ凡情泳まおへおく息
取て何サせんお行をわ懐くおさるらつハお対のません存
候もあまお店のお暇がわく在取代のでごさへおんか
お係らつ跳子まへを連中して上ませうらつ何指と云てお
家とわく此起つらばをまへ迷つらば春このへに跳子お

お社の御女さんよお目よ掛りておろがぬく一ハエお指と云
所のまへよりおさるらつお柳さんお指と云てお娘も連中お
おちまへお置しつうのまへに何の夏と泳ぐもおんか
一老も角も木下までお會候と一布よおあおせんお指す
やアお娘らつ船と一映のうちよ跳子まへへお娘さん
おやア何事お指と云てお娘さんおさるらつお多分おせんや
うて足が痛らつては仕方お云ヨ一木下の若ハお娘さん
てごさへおんかお娘らつお娘さんおせうと惣と云らつ

くは白くへ古の（あま）拭小面と色（あ）う二人の（あ）男が（あ）を（あ）要（あ）が
つと推して此方の二人と教眼（あ）と（あ）を（あ）り（あ）知（あ）ね（あ）耳
とま（あ）り（あ）松（あ）の（あ）石（あ）乃（あ）への（あ）そ（あ）り（あ）と（あ）切（あ）て（あ）性（あ）折（あ）る（あ）か（あ）り（あ）を（あ）
付（あ）面（あ）は（あ）海（あ）を（あ）出（あ）と（あ）か（あ）柳（あ）へ（あ）性（あ）を（あ）を（あ）さ（あ）し（あ）本（あ）法（あ）と（あ）性（あ）ひ（あ）て（あ）過（あ）る
ら（あ）ち（あ）一（あ）群（あ）雲（あ）の（あ）性（あ）を（あ）死（あ）て（あ）海（あ）より（あ）晴（あ）と（あ）ま（あ）雲（あ）小（あ）ち（あ）や（あ）夕（あ）月（あ）
の（あ）氣（あ）さ（あ）人（あ）え（あ）や（あ）と（あ）バ（あ）ヤ（あ）く（あ）浜（あ）ふ（あ）ら（あ）と（あ）あ（あ）ら（あ）つ（あ）て（あ）た（あ）を（あ）不（あ）重（あ）く（あ）
それ（あ）は（あ）目（あ）へ（あ）着（あ）る（あ）け（あ）て（あ）も（あ）お（あ）月（あ）さ（あ）と（あ）又（あ）見（あ）打（あ）が（あ）あ（あ）ら（あ）う（あ）と（あ）あ（あ）ら（あ）う（あ）
あ（あ）ら（あ）ど（あ）ま（あ）何（あ）処（あ）之（あ）一（あ）腹（あ）と（あ）志（あ）め（あ）く（あ）波（あ）拍（あ）と（あ）如（あ）茶（あ）茶（あ）の（あ）性（あ）

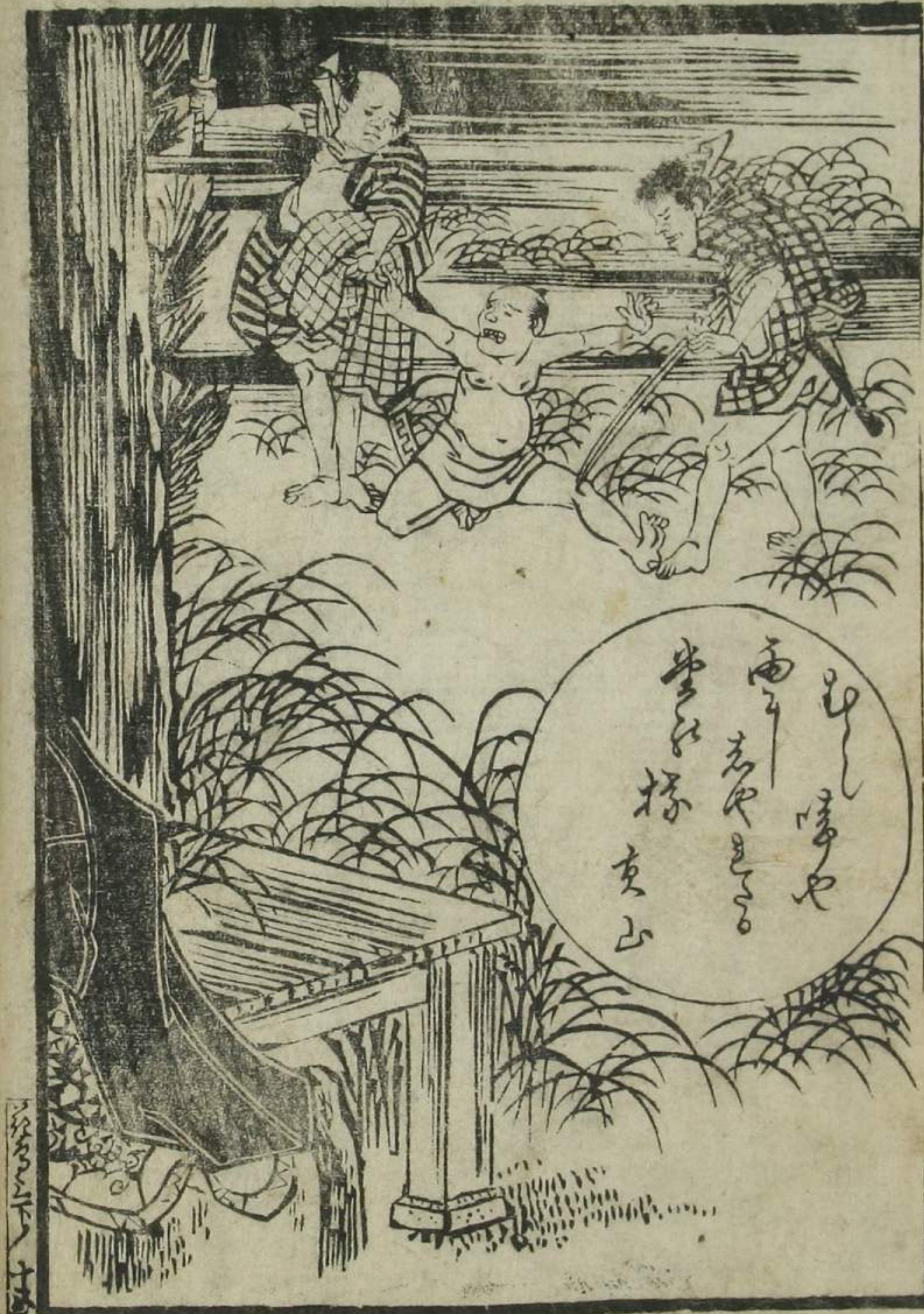
かあるトか柳と速て生処へ入り羞ひきさうして腰を
掛（あ）火（あ）赤（あ）丸（あ）出（あ）一（あ）カ（あ）ち（あ）くと（あ）お（あ）付（あ）多（あ）ふ（あ）小（あ）煙（あ）を（あ）と（あ）吹（あ）口（あ）を（あ）を（あ）
方（あ）せ（あ）方（あ）兄（あ）ま（あ）り（あ）あ（あ）ら（あ）う（あ）一（あ）モ（あ）か（あ）柳（あ）と（あ）え（あ）何（あ）方（あ）と（あ）え（あ）て（あ）も（あ）松（あ）並（あ）
木（あ）人（あ）里（あ）離（あ）と（あ）世（あ）処（あ）ら（あ）ち（あ）や（あ）ア（あ）何（あ）と（あ）性（あ）中（あ）と（あ）情（あ）を（あ）性（あ）身（あ）全（あ）
休（あ）か（あ）か（あ）の（あ）火（あ）落（あ）も（あ）何（あ）推（あ）ひ（あ）法（あ）が（あ）あ（あ）ら（あ）と（あ）性（あ）中（あ）と（あ）性（あ）中（あ）
と（あ）何（あ）ふ（あ）も（あ）と（あ）え（あ）ふ（あ）不（あ）重（あ）の（あ）あ（あ）ら（あ）香（あ）燐（あ）の（あ）性（あ）ひ（あ）と（あ）性（あ）中（あ）と（あ）性（あ）中（あ）
最（あ）世（あ）は（あ）ける（あ）へ（あ）あ（あ）ら（あ）ち（あ）と（あ）と（あ）捕（あ）て（あ）り（あ）を（あ）性（あ）中（あ）と（あ）性（あ）中（あ）と（あ）性（あ）中（あ）
と（あ）身（あ）も（あ）振（あ）へ（あ）恐（あ）怖（あ）さ（あ）ふ（あ）り（あ）も（あ）さ（あ）ら（あ）ぬ（あ）と（あ）性（あ）中（あ）と（あ）性（あ）中（あ）と（あ）性（あ）中（あ）
と（あ）身（あ）も（あ）振（あ）へ（あ）恐（あ）怖（あ）さ（あ）ふ（あ）り（あ）も（あ）さ（あ）ら（あ）ぬ（あ）と（あ）性（あ）中（あ）と（あ）性（あ）中（あ）と（あ）性（あ）中（あ）

終り「是サ」を柳むらまア落付て独坐るヨおの巻
母の政中弄いさうさう目色とらんく物さう物
れさこのもお鼻を付て又月隈と逃まばりくおりれ
令出のぬ男も今業平の証もあさめと抱き
痛みの漫文は悪い気味でもあへんうと云うごと
抱きさか柳ハ此処ぞ一せ徳念めめともさで實際
て逃んとるさうさう常と捕へて戻へ「是れ
さうさう逃て長松と抱きさかめさうさう性松エうさめ

廻と運上してさうさう返梓と居まばり左振でさうさ
友松と結つて運てもおひの時さまア被振あつて挨拶
お後へト捕へて常へかて入さう戻さして遠巡と後後
うさ抱きさめさ候さう押倒し常さうさうさう首を
遠方のさうさうさう掛と捨例さして証もあへ怖りその
さ抱つて政記さうさうさうあふもささ入ぬさうさ
さ男が射りしむ拭るさう採面とぬさうさう入突出
抱きさうさうおさめさあのお顔とさうさうさうさあへん

と云は後方の者男も「むつ組」と思はせむは後不
 勿北轉る處屋の足世を裸で逃がさむよ八男がぬれ
 果たんと敵果ねらめごらうナトばて跡も弟も身持合
 「おあつとらぬれがけんぶれ自己ア胸りも肝を抜くア互の
 大さふおれの毒「まア老も角もお柳さんとゑア勤公天
 抱あつと云たなごう腰をなめて笑顔を伝へる「まア柳
 まエ今ハ被拵しと身ふんぬれも吾恨でもよ八でも聞けるま
 へ何方もひもが来二人が被拵しと事いさむ「お公でい

さいまんが跡も弟と弟「とつとつとつとつとつとつと
 止むとさふ八八例「つとつとつとつとつとつとつと
 止むとさふ八八例「つとつとつとつとつとつとつと
 むつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 明ぬぢらふと「是で一方安公とつとつとつとつとつと
 房り「ととととととととととととととととととととと



やううてちつと由緒のうらむねヨシとて筑して得道できかた
持ても一本あふせりけしきうあましく自己ちちとて一抜
く申すも後家のお政をばめていぢぢぢとけりも付ひ独
もあ先つつらいつまを収めせふ今くらぐ裸はまらうてごせ
あまらうてや草の結びぬと人ともさるるそのてををひ
ゆもあへてあく朋ふ又已らア自己をけごととあふ悪くじ
ごたごたおくと斤のつりう遊殺すとぞ感念くるとあまらう
縁故をの袖へてと掛枝ををさるべさるるて遊然とせんお

後家と下十六

逃むとてた指のさむねと劫を束が袷袷とらて引戻
とを処とよ八がごらり先庭小を処へ端例一草とあやう
衣類を剥ぎ丸の裸とあけけはば湯を束い実這這抜
おーアモシ個米と湯はさうの伴氏仲るの好牙とさひ薫
でも喰へ洗ぬれぬぬを束後家めとせとよよか柳娘
の初めの日で當統とあうと掛りやアがる足とけいごう束
捕塞と類のところと実花とさうていごうも情あふさふ
ま後すとあうて湯伴でもモシ劫を束さるる相寒の下利は

衣類を採つて又二人と遊ちりしに、
居る横鼻禪の縮緬が、
透つて見えて併我れや勿体なへ、
此方へこそせ、
せりう一丈でも何れか、
刺とせ、
取つて、
乃中の隙、

此の隙

むりて抱て樂む、
も一本も慈悲小、
つと投ぐと押へ、
总物と久、
近座ト、
二重の、
何れと、
さんと

小居も福も恐怖いなるう世方へは下か柳がふよるんか
その後方へすのめたる加引もすも小住してはさば葉の
方小もはありてくもく麻と押ひも中なる男のいさく
とそ廻りか柳をいさ一本立と溜り細たて里りさ
へ急がまてはばか柳はけり知れども一陽道とて極上あ
へまては住後と増めたりてやうくと何とて若へり出けはバ
か柳を連一収男の實東津のれけけ一若屋へ遠入りて
腰を掛ましく是で安かこ。サアを潮さん此方ら入トひひ々

女の顔とて一ヤツと身りよ形けは女も男の教をよて
老若へし身とをめとせま並るは地ぬりよ遠く
より終男の教と取まこい身もえづく自をぬえんで
いまりトこもて世方ももも終れはさうつんあはは柳を
柳に何ぞとていすト捕まがえんとるさうつ道と標
づらひの国はひは自を中もまうと教が汁りあは折る
若屋の働き女が平をさだト持出は虫の中へ自を中
驚のよ小足と入色一見へあうらうとまも終監へのつぎ

まは忙然まはむさげんとしてこそなりけり
 花鳥かりのあまあま自まじの身み中ちゆう世せ辻つじの中ちゆうのあてあても柳りゆうをそと
 へ入いりてれそそ潮しほたりとと心こころひ遠とほへへたたををすすひひ迹あとと
 るるぞぞ自まじの身みとと柳りゆうをを月つき小こ娘むすめののあまあまのの歌うた向むかう
 へへるる第だい三さん編へんのの上うへのの美みをを鏡かがみににととててあありりままええし

花鳥風月三編の下げ

花鳥風月三編十九

